

2014年
12月1日
月曜日

韓 燕麗 准教授（映画史）

『ロング・ウォーク・ホーム』

今年の一月第三月曜日に、アメリカで『ロング・ウォーク・ホーム』（*The Long Walk Home*、1990年）という映画を見た。この日は、アフリカ系アメリカ人の公民権運動の指導者として知られたマーティン・ルーサー・キング・ジュニアを記念するための祝日であった。

映画は実際にあったアフリカ系アメリカ人によるバス・ボイコット運動を背景にしている。1955年のある日、アラバマ州モンゴメリーで、ある黒人女性がたぐさんの荷物を持ってバスに乗り、空いている席に座った。そこで一人の白人青年が、立ちなさいと彼女に命令した。彼女はその命令に応じなかったため、逮捕されて有罪となつてしまったのである（ローザ・パークス事件）。今日では考えられないことだが、当時はバスには白人席と黒人席が区別され、黒人はごく限られた席にしか座れなかった。彼女は白人用の席に座っただけで犯罪者になつた

わけである。この理不尽な事件に抗議するため、長年屈辱的な差別を受けてきた黒人たちは、全米各地でバス乗車を拒否する行動をとった。映画の主人公の一人、白人の家でメイドとして働く黒人女性のオデッサも、バス・ボイコット運動に参加した。芯の強い彼女は毎日自宅からの長い道のりを足にまめを作りながら通い続ける。彼女の雇い主である白人主婦のミリアムは、それを見かねて車でオデッサを迎えようとするが、夫をはじめ周囲の白人たちから猛反発を受ける。映画はバス・ボイコット運動に参加する黒人たちに同情して協力する白人主婦のミリアムとメイドのオデッサをめぐる展開する。

映画を見終わってまず感じたのは、それほど昔でもない1950年代に、このようなあからさまな人種差別が公然とアメリカに存在していたことに對する驚きであった。そして次に驚いたのは、当時のアメリカ

白人中産階級の家庭における女性の立場の低さである。一見して何の自由もない裕福な生活を送っているミリアムは、仕事を持っていない、自己主張ができない、つまり自立できていない実に可哀そうな女性であった。映画のクライマックスでもっとも感動的な瞬間は、彼女がはじめて自らの意思——それも夫とは正反對なことを強く主張できるようになり、夫の目の前で黒人たちと同じ陣営に立つた時であった。

日本のことを考えてみた。この平和な日本で、あたかも差別など存在していないかのようにわれわれは平和な日々を送っている。しかし果して本当にそうなのだろうか。今年の8月29日に、国連人種差別撤廃委員会は日本政府に対して、ヘイトスピーチ問題に「毅然と対処」し、法律で規制するよう勧告する「最終見解」を公表した。ヘイトスピーチとは、人種、宗教、性的指向、性別などの要素に対する差別・偏見に基づ

く憎悪を表す表現行為のこと。2014年現在、日本には、ヘイトスピーチ自体を取り締まる法律や規制はまったく制定されていない。表現の自由という名のもと、言葉の暴力が保護され、日本の社会で公然と横行している。よくヘイトスピーチの対象とされる「チョウセンジン」という言葉は、いわば1950年代のアメリカにおける「黒人」という言葉が持っていた同じ負の意味を持っているのではないだろうか。

ある意味でわれわれはみんな映画の中の主婦、ミリアムである。彼女は周りの自分と同じ立場の白人と同じように、社会の中に存在している差別的な事柄に眼をつむることができた。しかし彼女はそうしなかった。彼女は自分の心の声に素直に従い、自分と肌色の違う人々と同じ陣営に立つことを選んだ。それはとても勇気のいることで難しいことだが、しかし生きる上で非常に重要なことではないだろうか。